尚志3年ぶりV 全国へ

高校サッカー県大会

第九十三回全国高校サッカー選手権県大会の決勝は一日、郡山市の西部サッカー場で行われ、第一シードの尚志が5－0で連覇を目指した第三シードの富岡を破り、三年ぶり六度目の優勝を果たした。尚志は十二月三十日に東京都・駒沢陸上競技場で開幕する全国大会に出場する。

（18・27面に関連記事）

決勝は昨年と同じカードとなった。尚志は前半十九分、富岡のオウンゴールで先制、後半十一分と十四分にFW林純平選手（三年）が連続でゴールを決めた。後半二十四分にFW小野寛之選手（二年）、三十五分にMF中村駿介選手（三年）が追加点を挙げ富岡を突き放し、決勝で敗れた昨年の雪辱を果たした。

富岡は前半は粘り強い守備で健闘したが、選手の足が止まった後半に失点を許した。

県大会は県サッカー協会などの主催。一、二次大会に計七十八校が出場し、トーナメントを繰り広げてきた。

３年ぶりの全国大会出場を決め、喜びを爆発させる尚志イレブン

震災乗り越え躍動

尚志 県高校サッカー

郡山市西部サッカー場で一日に行われた第九十三回全国高校サッカー選手権県大会で優勝した尚志は、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故を乗り越えた浜通り出身の選手がチームの勝利を支えた。震災でいわき市の実家が全壊したMF稲村知大（ちひろ）選手（七＝三年＝は中盤の守備の要としてフル出場し、楢葉町出身のMF鈴木大（だい）選手（八＝三年＝も得点機を演出。「全国大会で活躍することが支えてくれた人への恩返し」。感謝の思いを胸に全国に挑む。

いわき出身 稲村選手

楢葉出身 鈴木選手

母に贈る勝利 活躍で恩返し

震災と原発事故を乗り越え、全国大会の切符を勝ち取った尚志の稲村（左）、鈴木の両選手

稲村選手は中学生だった平成二十三年三月の震災でいわき市平の実家が全壊し、家族は市内のマンションで避難生活を送っている。どこの高校でサッカーを続けるか悩んだが、「やりたいことを思い切りやりなさい」という両親の言葉に後押しされ、親元を離れて強豪の尚志に進んだ。

尚志は昨年まで二年連続で選手権県大会で敗退。昨年の富岡との決勝では、稲村選手のファウルで与えたフリーキックが富岡の先取点につながった。「もう県内では絶対負けたくない」。この一年間、昨年の決勝の悔しさを忘れたことはなく、厳しい練習に取り組んだ。決勝では中盤の守備で活躍し、チームの勝利を支えた。

会場には、いわき市から母雅子さんが応援に駆け付けた。雅子さんは十月十三日が誕生日。「この勝利を母に贈りたい。全国制覇を果たすことが最大の親孝行」と大舞台に向けて意気込んだ。

◇　◇

鈴木選手は楢葉町出身で、原発事故後に家族でいわき市に避難した。当時、町内のサッカー仲間は散り散りになり、一時は落ち込んだというが、避難先でサッカーを続けることで元気を取り戻した。「震災を経験し、いろいろな人に支えられていることが分かった」という。

ドリブルが持ち味で、MFで先発出場した決勝ではサイドから好機をつくった。「全国大会で得点を決めたい。試合で活躍することが、家族をはじめ支えてくれた人への感謝につながる」と誓った。

高校サッカー選手権県大会

尚志 後半一気

昨年の雪辱果たす

攻撃陣機能し4ゴール

郡山市の西部サッカー場で1日に行われた第93回全国高校サッカー選手権県大会決勝では、尚志が持ち前の攻撃力を発揮し、連覇を狙った富岡に5―0で圧勝した。尚志は昨年の決勝で1―2で敗れた富岡に雪辱した。

尚志は12月30日に東京都の駒沢陸上競技場で開幕する全国高校サッカー選手権大会に出場する。組み合わせ抽選会は今月17日に開かれる。尚志の全国選手権大会出場は県勢初のベスト4に進出した平成24年以来、3年ぶり。

林が2得点

▽決勝

尚　志5（1―0、4―0）0富　岡

▽得点者【尚】オウンゴール（前19分）林2（後11分、後14分）小野（後24分）中村（後35分）

【評】攻撃陣が機能した尚志が富岡に勝利した。尚志は前半19分、セットプレーからオウンゴールで先制。FW林が後半11分にドリブルで切り込んで2点目を奪うと、同14分にはMF佐藤凌のコーナーキックから頭でゴールを決めた。同24分にFW小野が左サイドからのクロスを頭で押し込むと、同35分にもMF中村がFW林のスルーパスを落ち着いて決めた。富岡は前半、守備陣が踏ん張り尚志を1点に抑えたが、後半から尚志の攻撃に対応できなかった。

試合終了を告げる笛がピッチに鳴り響くと、尚志の選手は拳を天に突き上げた。昨年の決勝で敗れた宿敵・富岡に5得点で完勝し、2年連続で選手権全国大会出場を逃した悔しさを振り払った。

仲村浩二監督は「ボールをつないで相手を崩す自分たちのサッカーができた」と勝因を振り返った。前半19分にオウンゴールで先制すると、DFとMF陣が中盤でパスを自在に回して試合を支配。富岡の選手を守備に走らせ、体力を奪った。

後半に入り、尚志は足が止まった富岡に対し、波状攻撃を仕掛けた。後半11分にFW林純平がドリブルで切り込み、右足でゴール。林は後半14分にもMF佐藤凌輔のコーナーキックに頭で合わせて2点目を挙げ、「貪欲にゴールを狙った結果。役割を果たせた」と胸を張った。尚志はさらに2点を追加し、2次大会3試合で無失点を誇る富岡の堅守を崩した。

2次大会4試合で挙げた15得点のうち、10点が後半の得点。前半にボールを動かし、相手の疲れが見えた後半に得点を奪うスタイルを確立し、県の頂点に駆け上った。全国大会に向け主将のDF山城廉は「自分たちのスタイルに磨きをかけ、3年前のベスト4以上を目指す」と先を見据えた。

尚　志　5―0　富　岡

	尚志		富岡
	0	GK	0
	0	明	0
	0	新	0
	1	松	0
	2	渡	0
	1	山	0
	0	慶	0
	1	稲	1
	1	佐	0
	6	藤	0
	1	鈴	1
	交代	林	0
	小代	野	0
	4・4・2		3・3・2

▷【尚志】
後22分　斎藤凌（鈴木葉）
後25分　中村誉（松本）
後34分　佐藤（佐藤凌）
後39分　渋谷（林）

【富岡】
後14分　高橋（池田）
後23分　千葉（遠藤）
後33分　江川（国分）
後36分　上野（鈴木拓）

◀【尚志―富岡】後半14分、尚志・林（9）がヘディングシュートを決める

「狙い通り」頭で決める

尚志のFW小野

○…4点目のゴールを決めた尚志のFW小野寛之は「正確なクロスにしっかり合わせられた。狙い通りのゴールだった」と納得の表情だった。MF慶野雄大の左サイドからのクロスを頭で押し込むと、スタンドに駆け寄り喜びを仲間と分かち合った。中学のクラブチームの先輩が選手権全国大会で活躍する姿に憧れ、尚志に入学した。「全国制覇に向けチーム一丸になって戦いたい」と気持ちを高ぶらせた。

尚志の稲村ら優秀選手15人

県サッカー協会は1日、第93回全国高校サッカー選手権大会県大会の優秀選手15人を発表した。

優勝した尚志からMF稲村知大ら4人、準優勝の富岡からDF坂本敏樹ら3人が選ばれた。

優秀選手は次の通り。

▽GK＝中村涼人（聖光学院）

▽DF＝坂本敏樹（富岡）佐藤幸希（同）角田祐介（学法石川）

▽MF＝稲村知大（尚志）津田亘介（同）鈴木大（同）鈴木真澄（富岡）斎藤未来（福島工）鈴木順一朗（帝京安積）楠瀬駿雅（同）松本啓輔（湯本）

▽FW＝林純平（尚志）松本悠馬（福島工）村上涼（郡山商）

富岡 連覇ならず

粘りの守備 猛攻に屈す

2年連続の全国大会出場を逃し、ピッチに崩れ落ちる富岡イレブン（手前）

尚志の猛攻の前に、富岡の連覇の夢は断たれた。0―5の完敗を喫し、精根尽きた富岡イレブンはピッチに崩れ落ちた。

前半は粘り強い守備で1失点に抑えたが、後半は立て続けにシュートを決められ、集中力が途切れた。FW陣は最後まで相手ゴールに迫ったが、放ったシュートはわずか2本。尚志守備陣の組織的な守備に阻まれ、シュートを打たせてもらえなかった。

後半14分、試合の流れを変えるため、準決勝の帝京安積戦で決勝点を挙げたMF高橋洋人を投入。高橋はドリブルで果敢にゴール前に切り込んだが、尚志DFの厚い壁の前に決定機をつくれず、「3年間の全てを懸けて臨んだが」と涙を流した。

選手は福島市の福島北高のサテライト校に通い、市内の十六沼公園を練習拠点としている。一般の利用があるため1日2時間しか練習できない日もある。震災後、選手はサッカーができるありがたみを実感しながら練習してきた。佐藤弘八監督は「後輩たちは3年生の思いを引き継ぎ、全国を目指してほしい」と次を見据えた。

「仲間に感謝」

富岡の坂本主将

○…「悔しさしかない」。富岡の主将でDF坂本敏樹は、言葉少なに試合を振り返った。粘り強く守り、最後までゴールを目指したが、大量得点で波に乗った尚志を止めることはできなかった。サッカーは大学でも続ける予定だ。「今までついてきてくれた仲間と後輩に感謝し、今後も引き続き努力していきたい」と言葉に力を込めた。

3年ぶり6度目の栄冠に導いた　仲村浩二さん 42

「総合力、近年で一番高い」

イレブンから胴上げされる尚志の仲村さん

「正直ほっとした」。緊張感から解放され、笑みがこぼれた。3年ぶりの胴上げは3度、宙に舞った。

昨年の県大会決勝の敗戦から1年。「崖っぷち」をテーマに掲げ、選手に危機感を持って練習や試合に臨むことを求めた。平日の練習でセットプレーや正確なパスを磨き、週末の試合で実践。「1週間の努力を積み重ねた心身ともに強い選手をメンバーに選んだ」と振り返る。

総勢約120人の部員がおり、レギュラー争いでチームは活性化し、選手層が厚くなった。2次大会1カ月前に主力3人が相次いでけがで離脱したが、代わりに出場した選手が穴を埋めた。「チームの総合力は近年で一番高い」と自信をのぞかせる。

選手を仲間と呼び、共に戦う姿勢を前面に出している。「目標の全国制覇に向け、一つずつ目の前の試合を取りたい」と力強く語った。

千葉県出身。習志野高、順大卒。福島FCの選手を経て平成10年、尚志高監督に就任。全国選手権出場は通算6度目。

50周年に花添える

試合終了のホイッスルが鳴り、尚志の勝利に歓喜する応援団

スタンドには尚志の在校生や教職員、保護者ら合わせて約五百人が応援に詰め掛け、熱い声援を送った。尚志の勝利を告げる試合終了の笛が鳴ると、応援団は歓喜に沸いた。今年、尚志高は創立五十周年に当たり、サッカー部の優勝は記念すべき節目の年に花を添えた。

生徒とともに声援を送った倉又晴男校長（六七）は「選手たちは昨年の悔しさをばねによく頑張った。学校にとって今年はおめでたい年になった」とチームの頑張りをたたえた。

尚志サッカー部OBで、富岡との昨年の決勝に出場した大学生久保田孔了さん（一九）は「この一年間で選手たちは成長した。自分たちの悔しい思いを晴らしてくれた」と語った。